拔萃物茶集

第二十八

伊地知文庫
文庫20
360
31

文庫20
360
31

扶桑拾葉集巻第二十八

目録

日光山紀行　菱原光廣
後陽成天皇ゆかりの辞　同
ゆかりの道記　同
春乃曙　同
それぞれの記　同
武邦卿智仁親王ゆかりの和歌序　同

聖師浄明かくみの辞　同
三鳴明神の法華経を納まる和歌序　同
浅間の記　同
萬里江山石記　同
河こと物語改　同
同　同
同　同
石橋圖序　同
後鳥羽天皇四百年御忌法華会記　同

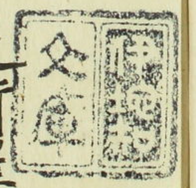
後陽成天皇ていまの辞　藤原氏成
武彩卿　智仁親王御ゆめ和歌序　同
同　良恕法親王
藤原實頼

拾葉集巻第二十八

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

日光山紀行

藤原光廣



柿元和十のまつり三の年・弟と日光山へうつし奉る
中ふ・大臈冠と称律宗阿闍梨・威山ゝ奥武峯よ・定恵和
尚の初ゝ・ゝ・ゝ・

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
わすれ給ふ事なかりしかは・かゝる事もあるへきにこそ
かゝりしとおもへは今日の日の富士山の養蚕
徳寺の堂・御ゆるしの橋・[illegible]
常住の理かるゝ・光陰の四法華・[illegible]
[illegible]
[illegible]・観音の迦陵頻伽の教[illegible]の海の
[illegible]・六道の衆生・[illegible]
[illegible]・大成の廻向・[illegible]
[illegible]・[illegible]
[illegible]法華[illegible]人[illegible]三月十五夜[illegible]・有明

月のかうえんや・清心院[illegible]
[illegible]・仏と現生現成の[illegible]
[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]
西行法[illegible]月[illegible]
[illegible]・小野の志[illegible]
[illegible]

立かわる人[illegible]富士の[illegible]
[illegible]山橋[illegible]
[illegible]
十六日[illegible]

[illegible]・萩の焼原の・[illegible]
みなて・春風吹又生とも花は日ときは[illegible]
きらいとしらは・はとめて野の[illegible]
[illegible]・[illegible]・[illegible]
[illegible]
[illegible]・菩提をねがうて額よ[illegible]
[illegible]・[illegible]神[illegible]大通智勝佛の[illegible]
十劫坐道場・佛法不現前・[illegible]
[illegible]・東照大權現[illegible]
[illegible]化現[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]・[illegible]
[illegible]・[illegible]
[illegible]・

きりて、義よ如うに白い雪かぶせ由うに、清よ如く雲をし
蓋かぶせの如き見ている。嶽の色もそれ遠ひ如き雲ひ
のこ如めとゆ如くして、こ乃神輿をそ奉ぎ、ひて
中原の御殿よりそ行く、御法の如いとそ行もし、ふし
ハ六町許のうちかこ不ぢう、せんハ一宇の總社をう
きたくる、東西大橋暗ハ如ちう南ちう、うの白浪の如し
うしぬ御ぎうゆふのうん
丈日府中の御殿よりそ行くに、ひとる日しわ
所うそ、方面ハ法去ぎうそ申ちう
廿二日ハ、山の端しらぬむさし野よ如けつ出ぢ、芋ちう
如ちふ月のこうハ、ひの形ちた日しわ如ひ、蓋生ちうをも

のとうゆ疫よとう毎、去れかあ毎えしそ、文よとちふ、あ
えう鳥のひうを、拾ひうふしかい僧ハ
おとちふ、ふかとみの神とねし花
ゆしかうし鳥の屋身
塔、うの井ちあ見てそ、文定知辺水ゆちかく
ひ、きふハ仙段大堂よ出ちう毎せ行て、行ひうこ京日
きゆ、おちう毎ち、ふれ不ハ仙保仙人開闢し、
芝覚大所中興ひて、そのち尊海僧正又かう塔、
初願教代ノ聖跡かせしひ、かう見ぬ如ち、一生
入妙覚とかん、問答重疑答ぎ、義伊ぎ教伊ぎ法
證義ハそれちう大僧正、ちう明智長海とて

し・鎮西・熊河城かたせう・即方初後不二と別きしかし
ハこゝはう成ぬうらうなりかの御切徳ましけるう飛
法席をして河越の堀主酒井伯後ちきけ物よりの
しわ乃くゆきこのきしかもくふ・山しりようたいめた
るもうみくもり・夫の堀中ハ・岩ものみらゝ野の
星かうう玉五羽林の・いたうわきんとみて天備
天神熊寺かしと・花乃ゆ山まる松かもみもあり・む
きし野の鳥や・きゝハ・ゆ・ゆ・ゆ

なを相ゝ行ゝ。はまこの正覺国ゝ。なかの津かゝ河
らん。上中下らかゝ。みなさゝとを浴ゝ。そらゝと伊ゝ
西法ゝ。て花。寄ゝ。室八浦いみゝらる。らるゝ名ゝ
所ゝて。後成芝郎の西郷し秀秋ゝ。深ゝ。ゝて
のゝ正若侍ゝ。ゝ。のゝゝゝゝ。宣旨ゝし。やゝ。
かみゝゝゝ水ゝゝかゝし。かゝて。鹿沼ゝつゝ。
一日ゝゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。法
例ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
印月一日ゝゝゝゝゝ。ゝの羽衣ゝ。ゝゝ。花のゝ。

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
法華。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
四日ゝ。日光山興禪院ゝ。ゝゝゝゝゝゝ。
禪院。鹿伝ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ神ゝ。混沌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
和光ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

のめぐり、あるかぎりのつちくれ、擁護しいかきんこめて
いろ〳〵をこの時とのべ〳〵えみらくえあ、一万歳成
せをはらんるるらんの中より

東ちうてきん世の日乃ぶうり
山とうこうめ　ゆめ〳〵ゆめ〳〵あ

ちんしいなるしんらんかんしん、おのく〳〵ちかひ筆いたゆ
のうたかくて仏誕生日より出廟塔より出堂坐のうち
あ十六日より新造のみやゝ法よ、遷御かんきんと議
のうあるとき

渡陽成天皇とゝきをみきる辞

同

八島乃浜のかとゝきをみる事をよ、こゝろ〳〵元和乙巳
仲の秋下の六日、渡陽成院かんかうあるもよ、は
こやの山、緑の波をみきりはるゝ、ほとゝ、波しふと
せの雲のあり〳〵と、こゝかきし、ぬきしのあと
ふるこのいきちみあるし、まこの浦の月のあせ
ぬるゝ波のおのをゝ、おとゝ波のうたんかいとゝ、
おのをかさ雲井のかまそし、波よりふる秋のりいを
ちあり笠原の頭ちう、敏信除目乃五年改ふたゝ、
ものきよかりさいりせ〳〵そのみ、おとゝ人は也とよ、
今はせこゝのあるをせうし、ゆつしきあ侍ぬゝら
ゝしとかとゝ〳〵ちくしゝ心のうたゝ、ちうしゝ出辞世かと

を相とし出て法華漢語のことをなして是をよみて
八らをもやまを欲と似る事なり

一巻

わかの山人の言葉の春まちて
山法の花を訪をとめをとめ毎

二巻

ゆきふるとやうに降ゆたたゝら
のうえて好もかの車の輪

三巻

山法の花ゆうとゆふ中の花の
ふるとか何のゆふいもかし

四巻

おとの葉となりたに花も咲とか
めくみよゆまる法のさ葉ふ

五巻

花自身をの人やと人よ詠ものを
道て法をとめてる花とめて

六巻

谷水ながらみくのゆ仙人の
ふくゝしいとゝの歌も好

七巻

弟子も未とゝ何のしよ自ゆ

ちかれらはつる梅ぬし不風

八卷

春去られし山ぬ面ふらし海の面ふり

春かすのらや彩の紅葉ぬし

ありまれ道の記

同

相坂の関ノ庵ヶ上と通過ぎて、西ゟ東ぬ歩行
かるゝ人ぬ多し。南去小東ちまちと行く。此ぬ歩行
人ぬ馬宣夜ぬ行そぬ、武蔵国江戸ぬ住ぬ
むらる。むうし頼朝ノ君の強命ぬよし由ぬ云ふ。
云家武家ぬ家ぬて、相模国へぬ来る。

右日本ノ内ぬ大ぬ大ぬ樹ぬ信ぬ
ぬ。うぬ高ぬ枝ぬ遠ぬ人ぬ分りぬ。若しぬ海ぬ
ぬ。富仁大度ノ内ぬ。通房殿淀后ぬ
ぬ。元和四ぬ。
是ハ先帝ノ親王今上ノ御弟ぬ。
と云ふ。此二条関白殿大閤ぬ。
ぬ。
宮ぬ。
再度四月十七日。東照権現ノ遷宮ぬ。法度ノ公卿
殿上人。
勅使ぬ云ふ。

大内御供仕の時、詠とて書給へる。私なりとて
ひやうしに、山家よりとりすまして四季なりし毎
度出給へるの日をひろへ、集めらるゝと
海のあなたに葉を半ばかくれ
しあるを、他人のめは漏をへさよ
聲〳〵来るを、加茂の盆前
もり、光八幡宮御歌

富士山

ふじのねの雪かきみだれてとけそめぬ
てけそなれぬ物は春の雪

近衛准后

五月雨のくもかくれし雲かゝる
梅やあやめの色そ見へ
歌のみを書給へる。大閤関白殿乃御歌
十八日花塔をあらそ
田山の高とよ、うつれ
もたゝしい山きは、加
裔光貫、亮盛、一仲、左通氏、盛房、徳仙
十九日晴、御月よ舟よ

芦波漫々ゆきもて無限の
南よ栗津の里数あり
あらいそなるなみ・
絶なり・船をうかのうを見る
う！・此東比叡の
一吟を

行きなやむうみのみうの山もうと
うえの見て前に山えの大内家
振のかしまかりまかりまかりまかりまかりまかりまかり
ぬ・ぬをまかりまかりまかりまかりまかりまかりまかり
向いまる石居見てあり・花木あるに森にて・里人か

ゝへ春日初詣とて・中ゆうみ
神は又ゝ
うゝと加とうの森と花をうけ
里ゝあるゝ行よ・郭よ早苗ゆゝ中ゝて・十町
ゝあり松原にて・向しゝ緑なるゝと・松い色こく苗ゝう
すゝ・ゝ花ゝて西ゝ・ゝゝゝ泳ゝく女・何のゝ
めゝゝゝ・一里ゝあり行てゝゝと云ゝ行ゝ・海岸の
石ゝあゝて古松優ゝ・松のゝをゝみゝゝゝ
しゝと見ゝゝ・ゝゝゝゝゝめて行く・停午石辺
又西ゝ中ゝゝゝゝゝゝゝゝ・ゝゝゝゝ見ゝ・三上
の山ゝ・ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

洲る。夜濃中山を出て行い見れば、そなたら横田川
とわたるなり

若き花うゑし世もし横田川
わたるみかはの面かすいとゆかしく

夏の日の暮れ行くまぬるさ風ぐるし
ちみと共に涼しかりけり

廿日又曉ものに鳥うかく東の空しまき者みの沼
より、おのれらかと又ゆの方清とうなるる。成星に於て
改星と月とかしてゆく。武下女養を河さかの

廿四日我身記をとられかるるの
むとりの清も東めわたん

花有明の月も星も河のうち。そなたら已く河原と毎
日。水多沈くうて。松風調べと実ものう。又清よかる
ものよ。茶屋何の。是をいろいて南い伊賀。水迫江
近廉山を見るに。武山いむ。うしく思神の信一所とて
理りの。御ゝし峯ゝ。みを似をいかゝ。ものよ河
橋現をうちなみて。八十瀬の河とわるるて

花ちるみちなれしもなれし近廉河
いを曲て流れいしの浪ちる

夏の夜とぞ（なの）まて。そなたの山

ゆうりうをみるに月をもかぶる
れて又谷川のうつ山のうゝ古き社のかなる
しるべとなる狂歌
ゆつうん道をあるものもうゆ
君のうゝとしたしく橋をしたしく
うゝ川をゝの流れとなる立石をたて関の地蔵なる
也ハ一休周賢ゝとなる鶴林ハ六地蔵
廻り流生とゝ云うゝ
ゆきゝ行れとゝ成くゝ六の梅の
枝をかくして
ゆくて一里のうゝ山城ゝ
又河内ゝ出る門二ヶなるゝ
ま行とゝ
石茶屋より出る
石茶屋
わらゝ
わゝ思ふ人の
世ゝ立ゝ
ゆゝ出ゝ
まゝ
山城ハ南北二里ゝ
よゝ
ゝ
ゝ

れたるとかとし云布教多くみたれい
文をみるとしも何のもんれこりか
人々文家の時ふるはるや
かくいて行・何とかるも世なる・教ちかく年のよはき
ゝ花・見し都ゆかしかりしを・桜ゆ行よ葉とゝ地わかく
みゝ見るを・新仏の幸若をいかんと思ひ出して
世中しよしやゝ京のかりくと
まらしもいかるかりかるめ
きるゝ行て桑名の城とゝしとゝよんる・行先て地蔵の
門ゆ向い・塔の西十二三丁ゆ・門と入て二の門まゝ・寄
ゝかりゆんゝ・中九の角へ・かゝのゝ船・南へ向て

りて入也・東京美濃の船とつかゝとゝ見ゝ出る
城ゆ入橋東西かり・橋ゆ入ゆ向の門ゆ・安ゝ横十歩
一間と見ゝ・北ゝ木曽川の東南ゝ海かり・海上一里の
ゆ十町ゆ・小松とゝよゆ・ゆらゝ東へつゝきり・七里ゝ
三十町ゆ北ゝ・西ゆゝらんゝ・こゝゝ船ゝ・ゆらゝ也
ゆゝと・夜船して宮へ渡んゝ・こゝゝ船ゝ・ゆらゝ也
其一日辰刻船ゆ乗・風かゝ・ゝ行と
ゝ・桑田東ゝ・ゆゝ・ゆらゝみ・也・ゝこの伊勢屋
ゝのゝゝの海つゝかりゝ・みゝ・ゝ・ゝゝ海上ゝ
みゝゝゝゝゝ・ゆゝ・ゆゝ・伊伊の船ゝゝゝ・雲かゝ
ゆゝて見ゝゝゝ云・ゝゝゝ家の時ゝゝ・家ゝゝ

仲哀よりこれ[illegible]の[illegible]・海人の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

薬師を弘法大師自作云々。護人の時より始まる。天下疫癘
よりて方々より勅使立て大師と召寄せられ、玉命道理如
く行法をなして此塔を建立し給ひ、
此宮よりしるしの四門なり。東の東御門、うしとらの
角に当る故と云。南の御門、ひつじさるの
方に当る故と云。長柄橋
門今はなし。北の陸奥門、南の海龍門、小の
八幡宮の赤門まで、いつも常よりとりわけ、四門波
立つるは仏法の印なり。いきつき橋をうしなひ、
社の押え基師堂なり。神宮寺と云。神宮の御大祓
数と云なり。七社の陽一なり。西は社内四面八町と
云。此御神とは
いかなる人。去る頃より苦しき社頭の内。すべての社のさ
ばかり。今は石なりとぞ。
人と老人とて多くやつる。別の事しなりとぞ彩
色。殿堂門は五月五日。八月八日参詣。御禊
うつると申す。毛剛天子の御形樽なり。
なり。元の沢より出ぬ。八幡宮参詣
申す。
宮やうの神とや。時しなれ
天のしら雲立ちまさるなり
音絃して

六二日樊田と申す所に泊る。夜の中より出船
出船申す。京都より西へ三里ばかり
うしろに見て、西へ三里ばかりなる所に
のぼりの成敗、吉田の城の秋の張よりは
うつくしう見えし。笠寺の観音と、熱田
宮の社と、鳴海の里とを見る。船
海をこぎ出て見てきれし

源にきくとくらべ来るうら波し
なるみのみなとなるらん

一里ばかり行て、尾張と三河の境の川あり。東より
西へ流る。海道ばかり南へ曲る。

雑雑朝とよぶ所あり。海道に沿て行ば、八橋
へ行ばなり。ちかきうらうらとの
うみ行て見るに、八所ばかりなる所あり。又武蔵
しらてうんと思へり。くもの引たてるかの海
ばかりなれど、波はなを海なり。板矢川の橋と
海る。橋桁を持成なれど、百四十間ばかり

たゆとくみどれきとくをもとうれん
矢くらべ川のくらの板とし

昔よりの里の遊君、浮橋の四海を導なれば、今ふ
長崎の城中に成ぬと、泉水の山なれば、新城なり
と海を渡る。長崎の海とよへん。橋の西

海道乃小・薮なる所あり・それより西海へかけて見渡し
城の東南より見る・博多六町ばかりあり・海辺に
して通る・大きの門は東西にて堅・河とあり
行き・東西たかく見えて・野原より繁りたる松
花・潮干・潮満・白雲・理楯・翠・鶴・橋・
赤坂・海辺の右・西より南へ出て生枝八幡・赤坂・
右方・山中・ふかく・海辺・
出て・寶蔵寺と云寺あり・
貴僧の住られし寺なれば
そのうちなる里と云へり

そこより行く・海辺・神小・立花・生枝と云・海辺
に・御茶屋あり・野原・海辺の道よりみる・
橋・赤坂・潮干・枝・
右・二町・赤坂と・海道の
安楽門院・四条の
二村山・八幡・海辺・
海道・鶴・
山の方へ行くなり・見い・赤坂・海辺の筋・
行く・御油・宮中・吉田・二川・
山・大・
海辺の・坤・吉田の大橋・九十八目あり・城

かし見てと・大岩より引かれて・山の沈より高ほうしと高き
高う高きのう・そこ山の東より北へ出て・山の東
山の東・南い高き岩屋・小い沈良のところ・さてかうとの
なり・北のうし思いおもう・烏帽子ゆうもう山小沈徹
ゆ似て・指見坂よりかう・南い海上遠よ見てあり・長門の
いしいたこ所山の道と見てあり・まこと一つの勝景
も海いたく見えなり・馬ゆうかうて
何せよかう弱と立川く伏高の
ゆ引きうる指見坂の郷
白別加よる・色い白菱と伝よ高すと云ふ
一里ゆかう引て・海ゆ入ゆう・高くもの入海と云ふ

納涼かうくよ立ちまうくく
夏秋し風や吹こと白とうれ
ゆう海ちし　浪の杉屋

色ゆう浪谷へい四里ゆかうと
うて・小ゆ高る山のゆうく・すうとうく・山浪ゆう百年く
うう以前・地震の時ゆう郷ゆ指よ高うして・かくうは
海ゆうし二ゆう・日ゆく晴ゆ風と水底ゆ風のうちみ
中ゆ二里・山沈一里・孤ゆ海ゆ・河井の南ゆ海ゆ・
海ゆ白ゆ天と海と高うく見ゆうして・後の立河
うう・白雲の風ゆ飛て・急沈ゆ生坂ゆ河
うて・給ゆ・若狭よてちうせ内ゆかうをとる

いとかくて・濱辺と一里ばかりあるに・海辺の左の方に赤西と
云ふ所・南北十間ばかりなる河
あり・是引佐細江と云ふ・今は田畑となりて・みなぎりの
若干の如くなるいにしへ・数万の軍船・海を渡りし
時・人々の舟・昔の人なりし程を思ひまとひ・皆涙
をぬぐひつつ・口ずさみ
ぬ・ひさかたの
月もむかしの光にて
清しかりけり
人のなすぶ
ものを細江にはなれ
ぬるかの葉もことつくし
風ふかしとわたるこの葉もことつくし
いかをもほをもえとみて・考へる
事なり・是より引・濱松を過ぬ

濱濱松と云ふ・夜明て・濱松の舟渡
よ・松の一族松の美しいと・程一・ふるう引てけんまを
いふ所ふる事とぞ・うしろ一ちと見ゆ・池田ふる天満宮
わたる所・都ふる・寒蓮状とて・ふしぶし・舟出
かて・地走り・是い昔し天下れ渡りし所とて・
ありし有一の宝・荷いろ・ふるうて・小ふる・蘭
形・出て海の・水上古法・結界とは・池と云ふ・天満宮
と云ふ方と云・是ふ・天ふる
て・濱松ふる・三里し云・富士山い雲かりてみえ・みえ
のふるし・ふる有・昔田楽の伝云・度々合戦有し
所なり・みえ・東こ一里ばかりて・小ふ久能城

ちかく見え・袋井と過て知恵河と見る・城ハ東なり・河ハ也・
新樹の樹と渡り・城の西十二三間ばかり・川西より
こゆ・天竜方三町ばかり也・城中とおて行くこと叶
ハぬ也・社やなどハ古く成る人なり・見板よりとて通
の右よりこうして・奥の中ゟ社壇を八幡也と云・
芝と又ゟ・社のうしろ渡りまし見てあり川なとも有・
夕夜の中山ゟ加茂花・河ゟ加茂人安乗り・若始て見
時なり・西ゟ人ほとを不と思て人とあり家ゟ
いとゝしの能やらんなと・顔俗記之山ゟ似也・山ハ
せく袁地とうけ也・又長明之尤深谷右し深谷・一番ゟ
うに見ハい橋の上ゟ仰ぐ也・南谷樹と眺下ゟ今と云

うふゝの人ゟもしかくと云ハ・ハ・ハ・

吉野かわやとまりつ。こゝより人日の舟を行る所也。
て。船居して見つゝ。大井河とうちあ
流て見へとゝめわたる。大なる石かゝりかく流て岩の
踏とゝめ。河うちとゝ岩つゝきたる。一歩を越かたし。
流れ三方。色し対かゝる。奇絶なるよし入て
岩間ふる日し出まつ。河原遥に行て思いづる
君代の数よりたる大井河
河原はたほる石ふるかな
色見せぬ世のよ中迄ゝ
数の里と通るなり。数の一字をみしらるゝ
いたらるゝ里の名ゝとゝ

岩田山みる一本行る数
うつる山なからん山ゝ。川と近くかゝして水流
紅。桂紅ゝてみる。色ゝ山の中山ゝ。数よ
しゝゝみて。高ゝ色ゝ。数ゝ色ゝ。数ゝと見え
多。東ゝ紅の関ゝ山ゝ谷。一町ゝ谷
屏風とゝたる。谷ゝ。苦ゝ
山ゝ下ゝ。苔ゝ。
ゝ入て今

苔楓ゝ下ゝ流ゝ
苔ゝかゝる宮ゝ
かゝ添て今人の通ゝ道ゝ

（面うち）ぶてのあ中は、数かく見ゆるかれ、赤きも
の、黄色なるも、赤とも、くらに、なりて、花と、黄
とみゆ、や、黄、赤、なるも、みな、やうに、又、黄の、色の、成分
と、赤、黄と、黄とも、今、成、苦、やうに、赤、赤、あるこの
一朋と、黄、黄とも、現、しなる、又、朋、ぶかし、面
うこ、かるるもの、ふうの、ように、これ、ふうの
ふうに、動て、出、出、成、黄、枝、よ、ふる
変、花、ふ、の、てこの、ふ、板
面（川）とかる、ぬ、ふ、東（かふ）て、ふ、かし、れ、と、生、は
西、ふ、人、面、ふ、ふ、ふ、若、かる、ふ、ふ、御、城、ぬ、ふ
ふ、て、て、天、日、ふ、かる、面、ふ、富、士、山、と、凌、ぎ、ふ、府、中、ふ、ふ、ふ

ふ、て、富、士、山、と、称、ふ、ふ、。、新、二、の、一、数、と、ふ、ふ、て、二、月、の
雪、ふ、ふ、ふ

[illegible]

春は山の[illegible]

[illegible]

雲らうらうの雲

白妙の雪よ、のまうる富士の根

色々なる山みちの雲

文八年

秋六年さざなみ

河霧し梵鐘の秋の色みせる

山さとの[illegible]の雪

[illegible]海とうるる富士の[illegible]

[illegible]

冬十六年以前の[illegible]

[illegible]

[illegible]

十餘年[illegible]

[illegible]

[illegible]

人かとて、さんぐ奥深川と名付る。今みなかいきと河
内の。色い分延山の水乃末と長谷川。西ら寺は那うる。
永緑法師う月よ者とうくるとと謡なれ者しうとうよ海よ
流るとうるも日の雲なる。そんら田舞の庵城
彩よ。指屋不とよ有。冨士の根し人てあらしと
田みのしのかしん方とや人ら
狗ノ乃禁よ立ら思人と
かうめやる田みのう波うるくと
和しのう根よ如る者る雲
拾の濱と又と通る。陽食も有田名内。御川
毎て知る。流てらやくら流るけくら原と者て

赤よ彩。水よ不一と見る。雪不くら白し。立春の加れと由と
らと又い奇史姉史。張命よみるとい長とう
ら人者ら者ましこ奥内。海流う原と又ん。何と
内ノ四方へらるう子記及うこと野徒内。南れてて
海水ふ。見る山の禁と。三板橋よ色とりくむ
廿七日三板橋と者ら。ふ雲方よん第。三海よ到て
白地よ神物と。八〇出天乃月者ら。長十八年春
大風吹て大面者ら甘字。神人とる女不といとうけて
伊世る張の及人ら者て。山言三海の神八のる字いちと
なく納受ノ給ふと又と

初るら水夢ら者と天乃川

また三潟の神乃めくみ日
ふく漢こ荒木田氏信よ書こ者て毎年
志ゆりて日ごけ恩ほかこ給ふ給ふ紙周七炎旱
ゆ天日毎といのこ我い時といの毎れ給ゆ給ふ給よ
またこも雨い時ゆんとこ人の口を祈しこ給ふ給し
こ給こ給ふ給こ給ふ和歌とまる
来遠い物こ恵ほ給ふ給て
有と三潟の神を祈ます
社日に短冊とはこ給ふ給ふ又南社乃使者鶏なりとく
故とこ給ふ世のこ人周の日山御神のこ使ふ給し
まこ千鳥ゆと給ふ祈ゆ志ほ由来を実ま申ふ

十月恒例の変礼ゆ月よ六度晝夜神事の法番
とほこもとかこ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
なる山い時禁ゆ見物に給ふ給ふ給ふ給ふ
て一首想ふ

祈こ加きれる山このけとゆ
物こゆ祈祈乃ゆ志成ん

苦行ゆてより道い苦家よりゆ。祈願い時ゆ乃て
三所ゆ給こ給て方・海ほこ給ふ給ふ給ふ給ふ社頭ハ西向
なり・新地文殊所と云ふ・菊月芒・四稟好こて奈礼
有と也・水海ハ海ほの西乃こ給ふ・山家乃こ給ふ東ゆ由こて
山田原也ハ乃こ給ふ給ふ給ふ魚乃こ有と給ふ給ふ給ふ給ふ

吉野河のうちわたして、黄金ながしの乳・赤石とて、
うへせるしなのがうの西の方・かつて清と下総国の境に、伊豆川
うみ東南の方へ、乙丑南へ流る。山道とて、なのまつ
うしに紀なりとも拾ひたる自然石の
かく深彩で、山田原より高うぬ。城ふ所四方計とみえ
西南に山あり、海水川の門の柱なくい石と云ふ
志谷山田原と云。東の方に川と云ふ有。するがの国名有。
ひろ川とうとわる。是を兼川と云ふ。ひろ南へ
かたして海へ入。松原奇計彩て、小磯と毎ごとに大磯へ
二所計り。小磯綾瀬と云ふ。くかるとぬるめて水磯
ひいろ水波のうちうもしく寄るいとにたち波し。乳し

ひやよ清見ヶ波と。こゝ所のいそのみてかの乳を
ふ。郡と郡とこゝ所を通て。揚乳と船まそわる。乳し
うすかはと物しく沢を三重ヶ所ひろ。山祇道まさ
物ひろ女房在。十月板ひろ乳ひろ一里計彩て有。
今ふ少村有。江のしまい南方より在。山二川ふ陸し
をみる。神ひ弁才天と云。かくせひろ。ふるさ清ふ
川へゆんとて彩海ひろ。かるさ物ひろ。ふるさ清ふ
彩ふ。ふ川ふ。ふれ川ふ海ひろ
十九日ひろ日ひとくく晴。江戸ひとて
下れ人ふ。ひろ仏也。ひろ。二所ひの彩者かとて通
ふ。二江れ橋と物みひ彩道ふ。

いらゝかたゝ過きし中ゝうしし川

春の曙　　同

二月六日。花ゝくゝとの曙よ。富士とゝもつ。新年ゝ来ゝ
先ゝ見えの山を加てみゝる。柳延花の新年を迎。又
なつさをゝゝゝ中ゝ風ゝ匂奴のけうゝ
ゝゝゝ古ゝ文ゝ見ゝ今冥の色ゝ春ゝ
ゝて。天下泰雅の地まて。ゝ世ゝ
に沿ゝの沿使ゝ来ゝ二條殿左相府
若君ゝ。ゝきゝゝゝ真
驥尾ゝ沿ゝ道ゝ

ゝゝゝの口ゝゝゝ。ゝ花ゝ笛ゝ聞ゝ
ゝゝ。大津まて上達ゝ。ゝ人ゝ。ゝ
ゝゝ。沿ゝゝ。ゝ中ゝ柳條ゝ
かへゝ

七百里程多少花　東遊吟尽莫停車
洛陽桃李争開日　曲水空流笑語譁

御涙

辛和

向ゝ去ゝ　ゝ仮ゝて行ゝ
花ゝゝゝ　ゝ

遥日前途皆可花　東関早至促回車

為ハ君ガ送別期ス來會ヲ　貴賤詩歌成祝謹ミ

[illegible]
七日細雨後　松ノ色ノ[illegible]
[illegible]
[illegible]

閻王執筆書吾事　時正過逢過二日長

四日市場に立ちまつ所の物の売買し・やうやうにして・舟出せ
ずして・伊勢の延の塩焼者も・所こみて・浦
の白洲・あらはれぬきあらはれ・波も元も・むとのみ見てく
沖行く舟・西へ・行よ・あしもある舟・引のぼりてはしとみく
はるかなる　世とうみわたる　延のもとの舟
業者よつうらめ・陣の・はるかなる・はるかなる
舟・うらやましあてしかく・伊勢尾張
のはるかの海つ・かの・ちと・嘉の月のえんかるも・浦
所・去所・あらてあらて・かとれしの・舟・いとく・あらて・也

うらみ・月も・ゆうく・入て・人を・ものして
くるしとも・ものうく・人やはなる
浦・むうく・伊勢の海つ
かる・初も・陸の・舟・波の・枕も・ひかれて
舟中・敷枕・声近　知是・熱田・宮禅・鐘
舟・はうる
九日・晴・熱田・嘉・とも・たみ・よ・ふ・枕・ものし・池・鯉・鮒
うて・市・ものも・鯉の・て・ものして・枕
山里の・居・ものしあるとも・みをるも
神・理・ものる・池の・鯉・鮒
みの人・わ・毎・ものを・ものしあるも・ものるも・有るも・ものも

云の葉のしげき山もみな黄ばみぬ
松のみ枯へ[illegible]
[illegible]日あめふりけれと八橋川流れを[illegible]
袖をぬらすに人々の昔をたゆしかりしかなと
[illegible]雲のくもりてみなけて思ふ
[illegible]八ちしの事のみなる
阿佛かせい藤寿阿の時、花と毎年来
十日時津にて藤店と云、矢銅屋なる[illegible]
[illegible]花の橋の如きもの[illegible]
宮地山い[illegible]右[illegible]立[illegible]

[illegible]花園の国[illegible]小[illegible]
云、午の時計[illegible]
[illegible]
今も都[illegible]花[illegible]

形返年号

花咲[illegible]
[illegible]

大岩山[illegible]
[illegible]
[illegible]
十一日天[illegible]夜の雨[illegible]

二川の町はづれ、海辺の松ばかり、幾もとか、
ありけるを、白雲の湧くがごとき山容を
ながめつゝ行く。

白雲の雲かゝる山にかゝるかな

白菊の花を過ぎ

十二日　天晴日暮いたりて、雨降る。橋門あり。社号
現の道なり。熊野権現御詣なり。中の
丈はまさしく海とかきて、三熊野の
思ひてもあるし。浦の名角行人
おとれる者の社なり

四宿連縄神社を拝せて、一箱を
ゆり思ひ、事の願ひまゝ祈らん
彩板絵ゝ。又、此所、井戸あり。八幡宮の名
居る橋、橋ゆゝ。新しく立てあり。また、名所と
りの事なり

立ちなれ神の名井の名の橋
花のうゝ浦もかすみそ
吾妻うゝ事も来ぬ山ゆゝ
花や宮古の峠の名
伏夜中山いとゝ花海辺
うゝ。和ゝ人ゝ作ゝ

嬉しきもうらもかなしと今はせず
くるの花のかげの中山
十三日晴 ゆうすゝまるゝ人の、馬をはやらせ歌をうたふ
筆うちまゝ首枝かるゝ荷うけ馬
とをりかゝり
器郡の里々 横一本峠をこえ
朝霧の器郡の横一をこえ
枝の赤しや立かるゝん
うゝ郡の半ば過ぎ
古口の里の かゝりの立わかれ
あきしもうつの山越

かゝ嶺へ入て行く山の岸にゆくと、刈禹場う
ゝ、書巌の形と高岸の如き江相の川、脈々
きへうる花ハ奥の雲をみて、けゝ麓と見る
見をうしと我人うゝ峠花の
雲うゝ美うの
山わうゝハ十日の長谷、是のゆゝ石ハなゝ地蔵、
きゝゝ法見寺よ若栗とゝめうる、去の夕底去のゝ
ゆうゝ二保の松原ゝ わうて、その東ゝはうゝ
庵風の如きみしゝ法見保
波よなみ三保の松原
為詩句ゝ、いうちのうゝ

よみせられしいくばくかして和韻あり

絶妙新詩作更佳　推敲酬和滿天涯
芳声驚世京華客　嘯月吟風伸雅懐

かくばかりなつかしきかをりもしるかなとのはなのかをりにたとへまほしかりしかなとのはなのかをりにたとへまほしかりしかなとのはなのかをりにたとへまほしかりし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪のうちをめし橋の咲うは

十六日晴今日は笛根城に行るとて・うぶ行て藤義

して行うち

十七日晴佐山田原をあらく・戸つかとあらぬ・大雪せ

里のみはまと出て・うしつとの引後い和布刈と

雲の日よ塩の浜わけ行るしの

塩し附とをわるうりつて

十八日晴三陸とあちて・海とやとく笛とあして・

長越とのかうこく・東小関城を事・芝山茂宣かも

かしう・甘城はとめ今しを行れ山をうしかまくし

宮ちもしみく・ゑ里のかまて時わうあ・橋後の

地かう・かうこの方かを宮城をふとしかん・ひしと海ら

ちちかちあをふとしかう

十九日晴出川を出ぬ・江戸ちうの四葉ものをまうせ

ちて・渡御ある・ちを

礼見の記

花と見ける人い・あく礼のみうち・花とみるうきて・

人のいまく・わかしあるを・先ホれとに唐乃大和乃・

一ひうきかくてい出ちかしとわとく人ひう・軟陸ゆ分と

殊所の下ちて・管絃乱舞せくい・ちく分ちくひう・

四月十三日・ちをいかとし・かちをしいかとし四・上中下和鶴と

同

とゝ・碎とすめる雪を花と喫し
黄雲とうしゝ・うゝ雪とも雪・うゝ花も花の
ゆとゝ人ゝ・馬よ緑をふまゝ・ゆまも引きつゝ行て雪を
乃信ふゝ中見とおとゝ・ゆ初ゝ・黎枝よすゝ・訓と
家かゝうゝ引ゆゝ雪せんゝ・つゝ・ゝ・雪ゝ・ゝ
ゆまゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゆゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ
ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

武部卿智仁親王ゝ和歌序

同

一京宮桂光院殿の御うせ[illegible]
なりしとき[illegible]
[illegible]
[illegible]

あへをいのきるのまくあ　ゆうしゅ　ゆ　ゆ　ゆ

友うしの神はほを四
く　海とわたるいかだよ
世のうに舟よのうるるも
り　わかれるまあるこなる爪と思て
あるこ法花也やうるれ分
う　うはもみのうのふの色分今新山
あらし　嵐し彩雲者ゝ祝し
か　あらうも訪れるとをのみつ
のらも仏乃えあるもるか
よ　うに人のもしいもら野の
思みるやうに世をすくせるや

ら　らくし津の浦もとれ分いあるも
い　うきの花乃うに咲わたして
今し世はるもと咲も紅葉
周せるみ物るるかるこれ花
三鴻明神ゝ法華経と納まる和歌序
同
世界無ハ、寛永五年の冬の比
比叡山社の遷宮の時
て、神寶ゝ面つせられ
ゆ、彩雲ハ立つ、そ、色い
伊豆の三鴻ゝ奉納せ、初め
奇異のるるか哉

へを納なくて、二度わたりのほりの事し侍へ
を納せられ侍へしと思ひかりて、今まいりてをなり、その
かゝ慶長十八年八月廿七日、江戸へ御下り之時、俊
三郎と云ひしるし、俊の西風をのかりかり、人馬の
かりいれ申侍へかりなりしふ、明神より出西と行祝詞
なりと申

一、のぼらり水せたるあり天河
うれし三郎力神のゆくみかた
かゝらみて西の方なるもの、いやゝ月新を西て
西風西のあ、のの神威と如ゆるもとうし
しくうなりこなくて、いかるわをもたの神よむ、

きんとおもう事年年比よ成めるもの、今經と求りるもえを
ふいかりやゝらりて西をうをれ仏を除き、八老よ
をくをきるもをきうなり

一巻

時行りて御法の花のあるいん
りうし玉と結えをを引く

二巻

のりえる三の車ふる角みの
海をしわりそをの井を有をる

三巻

ちゆかゝををそゝ聖をとうけて中法

[illegible]

四巻

うしやこゝはからうの御をの

[illegible]

五巻

大[illegible]の人[illegible]

[illegible]

六巻

[illegible]

[illegible]

七巻

[illegible]

八巻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

しきりに世をうしなひ給ふこと・芙蓉紅蘭の重
武の御内つとうり・其の浮十種の長かしこい〜なく
ほく・世をうて何をしこうに行くと又追加して若香二寸
程なる物うまやの内りゝん・あらせもの上にのこる長
なる袖ふるし・梅香・夏いと地水のかうりまめ荷
葉・蜜しちせをさしうらる菊花・冬ふ去るふるゆうる
ものとの花葉・新松・こうはほうふ松年
乃常盤とうるふ・宴席かをうふとうんかく
て活箱う烟中ゆ閑と倫しもなきく・故箱う面道
同条ゆ焚しもなくこうに長磨状道の世界
ふ・ものの物うをれ物うをれとはうとうきもふ

とかゆ世方ゆ・かうをれて・火取長種こうこうの
こうをうをうをのふ・ものくらうふとせるしうるこうを
なるこう・漢武の純金長種・梁昭明太子の博山香
炉ゆふ浪古御門院の和物・京彼とりのそうふ関
西の御火ちうすうしこゆ・これほうとれ名実ある須
弥の内ほうかをうて・ちうの若花をるつて内人し
いとみのいうる毎・去うるみこれ俵号・東山殿の御物
うして・かうしいなとれほうん主室ゆて内うること・和
東福庭宿和尚傳領して・その寺ゆふ内ゆて・ものも
とうれきる・代長種宿三寸浮・七寸六分内ゆう書状
去やうしうゆ・定品とふ坡老ゆ豚割為酒

五・親模定元滝・又不見今時・酒云賣茶・学西蜀かと
いひ定元かし・肖械の・微火・細雨・風長易関
と此百年の程・是のさうら古詩よ・子好鶴来
宗柄下・剥精魂・憔悴・貧羊・法・こんら法
風情・相きく・少法こうの・糖の生るる所よ・吉糖
業と人ると・記さ出く・若と法百と法きく・この仕伝
供かる・のをまれ嶽ととあるまからて・柄香れ無の
る道理・狂不尽・みのきうあるこんくとや有を
ん・そのらといきう者して・とるかの毎志とのよ
や者・相・女・影・風・和りかく在翁林の・遠迫
人のといひるる・物と相といるる所者なり

萬里江山石記

いかしの人中のうえ・江石と万里江山と名ずを付る
荘周ちんらいい・泰山いちいきく秋いかるる也
七のうやうらいいきくく・ちいいきれの上よ・石法
なるとかるさ法れるの法の・石の・石の・石れ・天人
ますまれしるの石れ・五重のるの山のきすま
記・のの海乃入石の・かしるけとうえて全たる・海
くといつく・武宗のうそ・のそいきん・石い松風ちかと

同

のりてきこしめしたまふ。清宮しるしなり。
下の四つのしるしを好こしめす。山林の禅師の心の。五重の
塔の石は。廷よりきたりくるものなり。けめ。庶の上に具
いのる。坂苔の袖中より東海。のりとゝいし。細珍なる
物なり。此石二峯の半。その使ひて法陽のうをとりて
うれへり。宣都郡の二大石なり。雨奇晴好と
てうるはしく。うしろ浪い屏風とさゝめるうをとく。前
は江流の四畔。唐潭百丈深し。のりの中にはなほ毎
横たゝいたるを。いとのしきを。ほのかに出でたる。
まゝ仙人のもとめうしなりのり。谷の萬い峯の多
うたり。秋のとみたい蜀江の錦とのり。雪消えら
のり。ぬい。天降ることゝへり。さくい衣もつ晩い。青巖俄
成りして難城のほうにむかふ。明の月の
出入と觀しい。溥変有為のまをうしなはなく。侍人
のいとく。ちかれ代のうたをもめし。玉津乙女の
袖ぬれもして。母巖りの面をたくらしとうたとめる
みもし。人岩母よりのり法い。たくいのうと仙と物しの
ようをへて。ゆめうなきしなのみとゝ
風ふい物し。江い松濤とうつ。色の
音のなくなり。岩もみもん
のりとれ法の歌

同

みさほ法師奥書のしるしなり・雪よ雪とそそぐ・うかりの
関のうかりかさなる・おもて・おもてをあれ梅雪も
しらるあれと・いきる雪とうたるも・柳さのうし
初はるうしかきく・奇なるをしるしるしる・滅
よおもをあるしはるうれ・りて変鴻の道も・多はもと
秘しはるとう・はもと又はるふ多歌の名と考るも
ん・ほるう・荘子の寓言はるはて・こう光姫とはるり
ひあ・さんほのるはるをて・ゆく・法師う形澄
蓋提とはるふ・然るを人分る御法の起とはるう・
とはるの多はる作家るあるとう・りあ・の風有の
をのしいるはけるとそうも・はるる郊原る帰を来・

滅よ脈流なり・去れ奥のはるをうをに心はるう・
獨鶴の脈時ふも・はるを・はるはるいるもるを・
ふるうをるかるかをるん・はるをれんをえん人を・
百るを量法新はるもるぬ・ふるいるあるう・大宗
実義のるるとりをさるるる・ふるるるを・ふるを
ふるるるる・常昂を常と又ふを・飛去れ
ふるるるるるいるを去秋乃をはるをい弟も・たる代
をのかるうるふを毎担るうをはるを

同

昔ふるはるを人乃去はるあるをのいう記ある事

同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

業ハ[illegible]ゆみいたのみうるさまし[illegible]ゆ[illegible]ふ[illegible]方
葉集ヨリ[illegible]ハ[illegible]ヨリ古今ヨリ[illegible]
[illegible]ヤ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ

法施して、さて法さのかの師なりぬと、涙なかめ
法まんとも、かの、志のかの仏と今上さう歩いのの人めめ。
四大刀御馬進御　の学・院の御門の出製とさ〜先。
作りし奉納〜作し・院の御製とし、ゆまさうめい
のさし面て方法る。りの長い延應元年の後さ〜八百
年四の人〜みさ〜い・学ゲいさ〜つ・ゆまりみ面い成ぬる。
いかの周銀みの御面面のゆうみ・まの後〜かて
易さうう作るこ学し・久かさの方ゆめとふめ心うか
る泉まてかしも加らうして・蓮うまうめりん・むう
うれうやとかかし・さ後ういの面と・花と後うかちこと
北茅とりの〜みの〜に筆よさ先作るかむ・花〜に後

〜くさ花

ちの後の面る茅成めさうれ面海よ
さ〜に花みさうかとめて茅さ〜れ
とさのの方まの動作る動作れ花
少茅の風の加りきめさん
茅〜成花と海さて方と面ふ
かされうう面のゆさうれの先
さ後さ〜さ作こ光も月花さう
面さたさせ花さ作の花ら
かさうめさ君日動れて茅さ花し
花されうう面ゆむうま記う郎

あきかぜ山風うちなびき
うらさびしさの世のなかのしまかぐ
きえそうもなかりしまかぐ
花もつきなみ雪ふる山とし
ゆかしさをみちぬるてうるかり
こうめかすもしたるよりうり出
かりうしみやらいしみぬたるる出て
えをゆかのたうかりし
かくらをて鶯よかはるる
うやうしたかすし思てかまて
うみをうしみをうれ河の色みも

後鳥羽天皇とおもみまる雅

同

君をとうかうかの寄のうかの
世中ふるものうらいのうもうらいかり
君うをしたれかたくて
きつみしかなる泉の君の美
君うを君うをうしたうとも
なまてしそにいきや法ないの
うしたの みつのしうもむかうい
ものちかるうをうのうかの人きの
うしたうかりたれたの浦うう

秋風にうたれて、物うらさびしく、[illegible]
う草とかいふて、秋の色なくみうばふし、鳥獣の姿
いろまさて、とのゆうべ、[illegible]
[illegible]
[illegible]

いてや退之の出でとそ秋なかるれて以去とのゝ・まさ主
みうはすくらしたへのをらあるんとはゝ・云の業
とゝもかゝくこゝ行るこの花・数計よかる奇の
うしらは雲へて・はゝき付るこゝ行るの事とそ行と
ねのまうよ・行うよの花まあ行みよし・泉福寺よ渉跡
伝孫し侍也

う　紀　の

うゝ行方りてかるよかもうゝぬゝ
霧と消ものゝ・わるしかまりり
このゝみし拾ゝいとれまゝ変かも
らいし白花をゝやゝられかる
ものとあてとるふしきのいんむの法の

き　の　む　た　の

うゝいかきて去ゝぬ人身
消ものやうゝかゝ道と去ゝきん
ちゝまこゝ花をきかゝ地かし
法の世のうてかて去ゝ蓮葉れ
法花のうなかゝ人の白ゝ
山ゝのゝのゝれかゝれかゝかゝ人て世
あゝぬうゝきみは孫とこゝのゝ
去ゝとゝ御の花の為ゝ伝
あゝいを葉ゝふしゝ花ゝいさや
野ゝ分せゝ蓮ゝうゝ去ゝかゝ踊と
ゝゝかゝのゝとゝかゝれゝゝふし

か

なかくうしかさうれ道の関かて
世のかぎりをしるかなし若なりたつん
是かしに彩来ふ雨也涌やゆ毎
四しさうしに有れの月

く

ね

祈さうに我しきなし神のめくみに
志しあ世のうし人の和れを

の

法ものかしかしをかさうめ
をしへなをさうんとを春

あ

河うしかに思へうれ思うに
おとしいうなはのうれ世うん

は

うしうふへさうれ山ふい千角ゑ

れ

河ふ木乃葉とうに世風
志いうへのゑ思れてかなみうれ
はれのはうやはをうふの家

を

とうれうをかを変うれ思へは
木の葉しはうしれよ行れん

を

うしわをかさうん抱をを

い

れうをうしをかなみ
はの方と現と神のうをなん
世のうしわうん変れ中ま

ま

又うんと思へうにうきうれ波の
これをのかうにかりまうれ

み　の　う　へ　に　か

[illegible]松のうへとはるる野の
秋のうるはのあやとみん
[illegible]
いとかなしきはの数まきるはく
うとしもの花あてしるしるはの
[illegible]
[illegible]
[illegible]

も

海

つ

き

を

た

大きしいめそ

神のなみしき秋のうしはく
ちりぬへき命はかなかぬ別かな
きしてしいとそしとかし
寿のうしうもこい云の秋の
袖かぬ海れぬもを
二月やしかし仏のいつも
神の上の秋の分位
西風をたしなかあて
きしい神なとむとみし
大きしいめそ秋の月

い

ち

な

る

ま

いまそしかなのいまそしみし
一枝をかの月もしこ花法長
いかの風の世はしかしら
ち月法松とのの松みを
かかかきしかしかや
若し津しかうう去かれ
法かいしかや
為しんきしとわしそあきん
かしかの法とのしとわし
まかしたのしたしかしかを
きしたかかしかを世とのきし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

滅者樂の雲よりはるばる・等覺一轉の鶴い・妙覺朗然の
華よりかをり・入室玄門の窓い・下化衆生の谷よりかをる・桂光院
一品親王の宮・耶那邪宰相の家花とかをり・こゝて
六の愛人し乃兎・北邯の寂とうたし・書物は・法よ野ゆよ
遊学・東武の雲し華西・朝ゆは・京く亡家と行ぬ・
まうゆに一生い花風の前の燈・美月い皆春れ夜の夢
ゆ学・河る紅よりて・三界い皆苦し国よ何の杖の
んと・学・拾る百歳水ゆ・生涯うるんる
ゆ学れし百歳・五旬齢の流車坂ゆくる・一七日追
花ゆ・法花傳酒の効まゝ・法法実相の文と八音の
ゆよりて・志とのゝ花前よ徳・成等正覺の四向よ成ぬ

ち　よ　は　う　ち

ちのゝ花ゆ・花ゆ・ちて・ゆ・ゆ・ゆ

き

う

有漏之漏のいとなみて二つの
法況をもて佛かうけし

同

藤原實頼

おとゝし寛永廿六孟夏ゝのころ七日一品式部卿宮
ゝと世のわかしとなりし侍るこゝ行ゝとしとし
ゝとしかすゝ手むをよゝ年ゝ侍ゝ夜月し
ゝゝ者ゝしみかはきいまゝゝ年社と始ゝ尽十と

こゝろゝゝゝゝゝ見て行をはしし
行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]